

# 銀友

本郷学園  
同窓会誌  
2000.6.1  
No. 29



本文6～7頁 湯本 夢ひろ光星 作品『Re Q Be』



## 総会のお知らせ

日時 平成12年6月24日 15:00より

場所 本郷学園会議室

(懇親会は17:00より)

平成12年6月1日発行

**本郷学園同窓会**

発行責任者 中村 允

170-0003 東京都豊島区駒込4-11-1 本郷学園内

同窓会のホームページアドレス <http://www.e-hgd.org/>

# 銀友・29号目次 00・6・1

会長挨拶	中村 允	1	学園だより	北島君シドニー・オリンピック出場	17
理事長挨拶	松平 頼武	2	学園教育・学園祭・スポーツ関係		
平成十一年度定期総会報告	編集委員	3	部活だより	日本文化同好会	中井 秀昌
ぼくの本郷 本郷のぼく(第二回)	平田 満男	4	漫画劇画部	漫画劇画部	宮沢 正喜
夢中人・夢宙人	湯本 夢ひろ光星	6	平成11年度事業報告・収支報告		
丸山敬太氏とのインタビュー	野口 貴洋	8	平成12年度事業計画・収支予算		
「高松ツアー」同行記	篠 喜三郎	10	会費納入者一覧		
同年会報告 中19・高3・高6・高18・中7	我妻 光久	14	本郷同窓会会則		
文化祭報告	物故者・編集後記	16	讃岐松平家江戸上屋敷跡発掘される		

## 言報

### 謹んで「冥福を

### お祈り致します

中1 池田堅太郎	塚田 邦善	中13 山田 卓也	今枝 信雄
中2 重沢 良平		中15 清水 文吾	
中3 大矢 重文	中谷 共二	中16 鈴木 信夫	舟瀬 虔一
中5 石川 太郎	森貞 実	中17 萩生田 昇	森本 昇三
中6 白井 豊臣		中18 荒木 哲夫	沼津 正
中7 岡 淳	小松 彰	中19 廣瀬 昭	長谷川 昭
中10 里村 栄	吉川 泰雄	中21 河野 英男	堀尾 明
中11 荒井 三孔		中22 坂本 直	
中12 久保田 治	広沢 郁	高1 伊藤 信晴	中西 邦幸
武藤 文雄	菊池 真	高4 芥川 孝陽	光男
		高6 佐藤 光男	中崎 克巳
		高22 仁科 敬	
		高34 柳館 弘	

## 編集後記

日時の経つことの早いこと、銀友29号発行まで日にちはたつぷり有るものと思っていたら、……編集各担当者の毎回が「苦勞さま」と思いながら、ご投稿下さる各位に改めて感謝致しております。

皆様ご様の様なものでも結構です。ご投稿をお待ちしております。

編集委員一同

(敬称略)

# ご挨拶

同窓会会長 中村 允 (中13回)



去る三月一日に三九二名の高校第五十二回生の卒業式が体育館で行はれ、二十世紀最後の卒業生と云うことになりました。

顧みるに一九二八年本郷中学第一回生の卒業以来実に七十二年、昔は一学年四クラス二〇〇名ならずで、現在は十クラスであります。

今年の卒業生で、皆勤(無欠席)四十九名特に中学から六年間と云う生徒が十四名もあつたことは、生徒本人の努力は勿論のことながら、その家庭の協力なくしては出来ないことで、母親と生徒との二人三脚の成果と云うべきであり、誠に喜ばしいことと思えます。

今年の中学の募集二二〇名に対し実際の受験生は二二九一名で、本郷の人気上上です。

現在同窓会の運営は、高校卒の役員主体で

夫々の役務を分担し、益々活発な活動を行って居り、同窓会のホームページも開設し、学校行事にも積極的に参加して居り、昨年の文化祭には多くの卒業生の作品を出品し、中でも江戸時代からの伝統ある型染や彫刻、絵画そして七宝焼の制作行程の説明等多彩な催しで、見学者に大変好評でした。

尚今年の文化祭は九月三十日、十月一日で、体育祭は十月八日に夫々開催されます。

同窓会の総会は六月二十四日学校で行いますので、皆様のご参加をお願い致します。

同窓会の会費納入状況は、皆様のご協力によって年々好転しておりますが、未だ振込みをお忘れの方はよろしくお手配願います。

# ご挨拶

松平頼武

本郷学園理事長  
本郷中学・高等学校校長



有難く思っています。

本校は、お陰様で昨年に引続き今年も、中学校、高校の入試では共に多くの応募者を集めることができ、レベルの高い新入生を迎えることができました。どのようにこの生徒たちを伸ばすかを、現在、全教員が真剣に考え、対策を練っているところです。学校では、毎年、新しい施策を打ち出して、改善をし、よりレベルの高い学校へと前進を続けております。

同窓会の皆様には、日頃母校のことを思い、後輩の生徒たちの姿を見守っていただいていることを、たいへん

今年の大学への進学は、前年とほとんど同じで、現役の進学決定率は五三・四パーセントでした。各自がほんとうに進みたい大学へ進んでいきます。

二〇〇二年からは文部省が決めた新学習指導要領の導入、それと同時に週五日制に移行しなければならぬことになりましたが、本校では高校卒業時に生徒が現状のレベルを落とすことのないよう、七時間目の授業を行うことや、土曜日の活用など計画を準備しているところです。このような対応は、現在の少子化による生徒募集がたいへん難しい状況から、本校に限らずこの私学でも危機感をもって対策に苦慮しているところです。

本校では建学の精神にある

『立派な日本人を作る』

をめざして、指導内容の充実を行なってまいります。今後共、同窓会の皆様のご指導、ご支援をお願い申し上げます。

さて、本年は四月の新学期開始早々、学校全体が喜びに沸いた明るいニュースがありました。今年秋のシドニーオリンピック、水泳、平泳ぎの日本代表選手に、本校高校三年生の北島康介君が選ばれたことです。本校の在校生でオリンピックに出場は初めてのことで、学校全体でお祝いし、応援をしています。先輩の皆様も、ぜひよろしく声援を送って、応援してあげていただきたいと思えます。よろしくお願いたします。

## 平成十一年度 定期総会報告

平成十一年六月二十六日午後三時より  
於 本郷学園会議室

平成十一年の同窓会定期総会が六月二十六日午後三時より本郷学園会議室に於いて開催されました。司会の芦立氏より開会の宣言があり、式次第のつとより中村会長の挨拶に続き議長選出を行い中村会長が議長に選出され、書記には寺田氏（高24）と野口氏（高34）が選出され、議題に進みました。

丹波副会長（高18）より平成十年度事業報告、関塚副会長（高20）より平成十年度会計報告、見並監事（中12）より会計監査報告が行われました。

秋元副会長（高7）より松平頼明先生胸像基金に関する報告があり、残金を一般会計に組み

込む件につき賛同を得ました。

引き続き平成十一年度事業計画案、予算案が各担当理事より報告されました。

銀友29号刊行案が秋元副会長より報告され、原稿の依頼、表紙の色刷り等の検討が行われました。

続いて篠副会長（高6）から名簿作成状況の説明があり、本郷学園設立八十周年記念（平成十五年）には名簿を発行したい旨が報告された。ホームページ報告を野口理事より報告され、昨年（平成十年）十月より開設しているホームページに五月六日まで、約千件を超えるアクセスがあった。また住所変更等、ホームページを利用してほしい旨の要請がありました。

### 会則改正案承認

村松副会長（中17）より改正の趣旨説明があり永年の懸案であった会則の改正が承認されました。今回の改正の役員任期が二年から三年に

延び、また評議委員制を廃止し、役員は理事に一本化され、会議も総会・理事会・会長副会長会議と三通りに集約されました（銀友30ページ参照）。

最後に本郷高校池田副校長（高14）より、昨今の本郷学園の入試状況の説明があり、中学入試は都内で一番の人気校になったとの説明がありました。午後四時四十五分、全ての議事が滞り無くおこなわれ、閉会となりました。

午後五時より、「みやこ」にて懇親会が行われ、賑やかなうちに散会となりました。追記 今総会にて承認された会則のつとより、七月の会長副会長会議にて新任理事の推薦をし、会長より委嘱されました。八月に理事会を新旧理事が出席し開催されました。

現在本郷学園同窓会の理事は九十二名で構成されており、各回期の益々の参加を要望する次第です。

（銀友編集委員）

# ぼくの本郷、本郷のぼく

## 第二回

平田満男 高7回

同窓会誌などでよくみかけるのは、すぎさうた過去の学園生活をことさらに美化することによって現在の自分のかたを肯定しようとする、そんな感傷的な情けない文章だが、このエッセイはそういう類のものではない。ぼくにあって、昭和二十七年に卒業した本郷中学についてはいい思い出がおおいのだが、そのあとにつづく本郷高校の頃となるべく、ああ、あの時代がなつかしい、などとは、おせじにも言う気になれない。それは本郷が教育の質の評価という点で都立高校におくれをとり、自由な校風をつしめない何人も優れた先生に去られるという、本郷学園の転落がはじまる時期にあたっていたからである。

なぜ、そんなことになってしまったのか。それは評論家風になら、ぼくが高校を卒業し

た昭和三十年頃からあきらかになってくる、大学進学をめぐる有力私立校や都立高校とのあらしに勝てなかつたからである。ぼくが本中から本高に進学したとき、中学三年の成績上位者で本郷にのこつたのはぼく一人だった。学業成績のすぐれた生徒の大半は本郷をみすててしまひ、そのかわりに、都立高校の受験に失敗した生徒が入学してくる、そんなみじめな状況を誰もおかしとは思わなくなつてきていたのだ。

そうした事情は、首都圏のほかの私立校でもおなじだったのだらうと思う。いわゆる都立の進学校は、その歴史をたどれば、ほとんどすべてが旧制のナンバー・スクールだから、大学受験のノウハウをよく知っていた。それに旧制の何中というよびかたをされる高校では、教員のおおくが東京大学の出身者だったし、それが

いの公立高校の先生は師範系のひとがおおいというように、おかしな住み分けがなされていたくらいだから、国立立大学合格を至上命令とする当時の受験競争のなかで、開成のような少数の例外はあつたものの、私立の中学校と高等学校が進学校として生きのこれる可能性は少なかつたのだ。

だから、国の柱など育ちようもないような本郷学園になつていったとしても、まさにその本郷に身をおいて育つてきたぼくとしては、大学進学競争におくれをとつたというだけで、当時の本郷を悪く言う気にはなれない。ぼく自身が昭和三十六年の四月から一年間だけ本郷の英語の講師をしたのを皮きりに、私立の神奈川大学旧二期校の静岡大学、そしていわゆる旧帝大の東北大学というように、さまざまな大学で教師

をしてきているから、教育機関の評価はむずかしいもので、安易に一面的なことを言つてはならないと思つている。それでは、本郷が非難されなければならないのは、どのような点についてなのか。ぼくの考えでは、それは本郷が私学として保持しなければいけない伝統をつしなつていったこと、歴史のある東京の中学校ならばどこでももつているはずの独特の文化を捨て去つてしまったことにあるのだ。

そう考えてくると、アメリカ軍機の空襲で焼きはられた本郷に、体育館と農具舎が奇跡のように焼け残つていたというのは、いかにも象徴的なことのように思われる。進学をめざすだけで人間性の根元について考えようとする教育が荒廃していくのは当然で、ようやくそこに気がついた文部省はちかごろ「生きる力」が大切だなど言つているけれども、戦後まもなくの頃の本郷学園には、生活に根ざした生きる力を育てようとする気風があり、それが堅実を尊ぶ校風になつていった。そして、三木末武

先生の農具舎と竹本正男先生、上迫忠夫先生の体育館とは、その生きる力を育てる象徴的存在だったと思われるのである。

ぼくは東京に生まれ東京で育つた本中生だったから、三木先生の農業はきらいだった。先生ご自慢の苗木の若芽にびっしりといっているアリマキを駆除する最良の方法は何かと質問されて、農業をつかうことですと答えると不合点格。それは指でつぶすことだと教えられて、ただちにその実行を命じられるのだから、そんな授業が好きになれるはずはない。それでも、戦中戦後の食糧難を知っているぼくたちは、生きるために農業が必要なのだとは分かつていた。そうした知恵が身につけている人間は、日本列島をまるごと工場にして公害をまきちらそうなどとは、考えもしないものなのである。

体育館での竹本先生、上迫先生の体育の授業となれば、これはもう、人間の身体をきたえれば何ができるか、その極限をみる思いのするものだった。なにしろ後のオリンピック・金メダ

リストが、目の前にいる先生なのである。体育館のマットのうえで、危険な空中展開をさせられても、ぼくたちは楽しかった。空中展開というのは、バーツと走つていって地面に手をつかずに空中で一回転する、宙返りのことだが、これができない者は中学を卒業させないと、竹本先生はまじめな顔でおっしゃるのだ。

これは、当今はやりの人間存在の根底にある身体性の重視につながる思想なのだが、その同じ人間の身体が舞台のうえでどのような美の世界を表現できるか、それを教えてくれたのが松平邸にこれも焼け残つた能舞台だった。本郷中学に入つてまもなく、この松平の能楽堂でみた『隅田川』は、それから五十年たった今でも、ぼくの目にもやきついている。人買いにさらわれた息子をたずねて都からきた狂女の念仏にこたえて、塚のなかからひびく梅若丸の声。この舞台をみなければ、自分は大学で演劇学を専攻しなかつたらう。ぼくは、本当にそう思つている。本郷が、今のぼくをつくつてくれたのだ。

## 『夢中人、夢宙人』

### 『夢中になれる事』を学んだ本郷高校デザイン科

30年前に本郷高校デザイン科を卒業した私は今でも恩師の唐沢政道先生から作品提出を迫られる夢を見ます。好きな事とはいえ、デザイン学科の課題を消化するだけで精一杯。夢を追いかけて、制作に没頭する自分。まわりには当時から漫画マンだった秋本治氏や後に本校の先生になられた芦立敏朗氏など独創的な感性を持つ同級友と共に学んだ日々思い出。『デザインの仕事で喰っていけるのか？』自分に問いかける夢への葛藤。

30年経った今、私が本郷高校デザイン科で学んだ事とは『夢中になれる事』です。

現在デザイン科は改廃しましたが私にとって本郷は創造従事の出発点です。

紆余曲折の歩みですが、今でもクリエイティブな仕事に従事できるのも夢中になれる事を学ばないで済む事ではない。『夢中になれる事』を学んだ本郷高校デザイン科のこの形こそ、宇宙を包括できるものなのだ。『ダビンチは限りなく大きい宇宙形を包括しようと夢中であつた。』私、千利休は究極の精神宇宙を小さな茶室に内包し、わずか二畳の空間に宇宙を含有した。利休は限りなく小さな宇宙を内包しようと夢中であつた。

二人は究極の宇宙観を求め、夢中人を超えて『夢宙人』となった。2000年の今、歴史と時間を超越したミレニアムスペースが生まれようとしている。その名は『Re・De・リ・キープ』という正32面体の立体球の正五角形と正三角形の面から成る茶室です。直径3メートルの球体であり、内包、外包に宇宙を含有した究極の黄金比空間茶室です。ダビンチのハードな宇宙観と利休の精神宇宙のソフトを兼ね備えた創造空間こそ二人の歴史的芸術家に相応しいシンボリックオブジェになるでしょう。

本郷高校デザイン科OBの私はこの作品を本郷の夢中人の一人として、八ヶ岳の甲斐大泉に

び続けているからだと思っています。だから未だに唐沢先生から作品提出を迫られる夢を見るのかもしれない。

現在、私は横浜市とイタリアのデザイン大学が主宰する『ピクデザインプロジェクト』のリーダーの一人に選任され近未来の商品開発プロジェクトに参画しています。2002年横浜ワールドサッカイイベントに向けての横浜発信型の商品開発プロジェクトです。

30年前に立体科を専攻した私はデザイン科卒業制作展で『子供用遊具の多様家具』という椅子やテーブルが様々な未来形をイメージした作品を制作し、ご鑑賞の松平頼明校長から優しく誉めて頂いた事は今でも鮮明なる喜びの思い出です。卒業という3年間の集大成としての作品そのものよりも、『夢中になれる事』の

制作します。

そして一緒に夢宙人しませんか。



『夢中になれる事』を学んだ本郷の卒業展は私に『アートデザインで喰っていこう』と夢への羅針盤を向けてくれました。

残念ながら、今はなき本郷高校デザイン科のOB30年目の節目として、ひとり卒業を開催：テーマは『夢中人、夢宙人』

if もしもダビンチと千利休がコラボレーションしたら、夢中になって何を創るのか？そんな仮想テーマに私が二人になりきってドラマ風に夢の共同作品を創ります。

「私、レオナルド・ダビンチは以前から究極の宇宙儀モデルを創造してきたのですが、その形パッチョーリの神聖比例論の正32面体の球立体になった。それは究極の黄金比からなる正五角形の面とその一辺と同寸法の正三角形の面を組み合わせ構成する正32面の球形で、サッカー



新進気鋭服飾デザイナー

## 丸山敬太氏 高34回) とのインタビュー



ファッション関係に精通している方でなくとも「ドリカムのステージ衣装を手がけているデザイナー」としてケイタマルヤマの名前を挙げれば、「存知の方もいるに違いない。デザイナー科出身で、マスコミから「第2の高田賢三」と評判の高い、丸山敬太氏に現在と懐かしい過去を語ってもらった。

現在のお仕事は？

丸山「『ケイタマルヤマ』ブランドを、独立した頃から主宰しています。ここ数年はパリ・コレに発表する衣装デザインが中心ですが、その一方、3人組の歌手でDream Come True（通称ドリカム）のステージ衣装も手がけています。それから最近、ケイタマルヤマ・キモノという着物ブランドを始めました。」

ふだんからとても多忙な様子ですね。

丸山「はい。お店に出す服の考案から縫製まで

の仕事に加えて、数ヶ月置きに発表会向けの仕事にも全力投球しなくてはなりません。パリ・コレともなると東京とパリとの往復は頻繁にあります。マネージャー的な役割をしている人もいるのですが、ほとんどは自分自身ですべてを切り盛りしています。」

ドリカムの衣装についての取り組みは？

丸山「彼らがデビューしてヒットし始めた9年ほど前からになりますが、ステージ衣装はドリカムのメンバーとの共同作業です。服を作る過程でアイデアを出し合ってコンサートや曲のイメージに合った作品が完成します。」

自分の求めているものと違う仕事にあたることもあったと思いますがどうでしょう。

丸山「そもそも目的が違うのですから、そこは割り切っています。ドリカムのステージ衣装にしても、自分のデザインで

100%構成されるといことは稀有で、ほぼ全てはメンバーの意見を参考に作り上げていくものです。紅白歌合戦のステージ衣装は例外で、自分のやりたい服を作らせてもらっています。それでも最初にどんなイメージにしたいか尋ねますし、自分なりに曲のイメージを膨らませながら作り上げていきます。」

着物を扱い始めたのが最近というのが同級生の私から見ると意外です。高校時代は三島由紀夫を愛読されていて、彼の短編『班女』を自ら舞台で演じた着物姿が印象的でした。

丸山「確かにデザイン科の頃からオリエンタルな志向はありましたから、新しい着物のデザインという仕事は、どこかで求めているものと一致したのでしょう。」

高校の話題が出たところで、デザイン科に入った動機やきっかけを教えてください。」

半ば偶然ともいえるデザイン科での3年間、思い出はありますか？

丸山「思い出とか特別楽しかったという感じはないけれども、毎日ずっと遊んですごした日々でした。デザイン科ってぶつつの高校生とは全く違う授業だったし、溝引きの使い方なんて普通教えないよね（笑）。ただ、モノ作りはもともと好きだったので、課題以外にも小説を書いてみたり、衣装に凝ってみました……。」

最後に、高校を卒業してから現在に至るまでを簡単に教えてください。」

丸山「最初、大学でデザインの勉強を続けましたが、もともと洋服がやりたくて1年で中退して文化服装学院に行きました。卒業してアパレルで3年間ほど会社勤めをしている間にこなしたアルバイト的な仕事を続けているうちに独立して今につながるわけです。」

お忙しい中ありがとうございました。

インタビューア 野口貴洋 高34回

写真撮影 友成公泰 高37回



# 「高松ツアー」同行記

レポート 篠 喜三郎 高6回

平成十一年十一月十一日付 参加案内書に依ると、同月二十一日(日) 十五時、四国「琴平花壇」ロビー集合とあり、以下日時のスケジュールがそれなりに丁寧に記載されていた。今までいくつかのツアーには参加して来たが、今回のようないきなり現地集合と云うのは始めてで、幹事も、ようやくくれるものよと思った。過去、四国には、宮仕への頃商用で何度か訪れていて、中でも昭和四十年代の求人難の時期に高松を振り出しに坂出、丸亀多度津と学校廻りをした事もあって、多少の知見もあるので琴平駅に行けば何とかなるだろうと腹をくくった。あとは便の手配である、これも今は便利なので時勢でPCを使って最寄りの駅から最良の所要時間と料金、乗換え回数等が瞬時に弾き出され航空便より新幹線の方がベターである事がわかつ

た。幹事(関塚正治、高二十)とのEメールで航空便組と新幹線組(関西本郷会は全員この組)の二つた通りである事も判った。

今回のツアーは、本年度(平成十一年)の事業計画に当初より組込まれていて、趣旨は、関西本郷会と関東の会員との親睦と学園創設者の松平頼壽候はじめ松平家ゆかりの地高松と、同窓会初の親睦旅行を兼ねた場所に設定した。一泊一日ながら費用が五、六万円予定され全て個人負担と云う事もあって、参加者の数が読めなかつた。関西本郷会の下準備もあって、東京地区と合わせて数十名の参加者が集まった。歳も七十代後半から四十代後半と三十の年令差があり正にOB会ならではのツアーとなった。当日の朝は快晴で、いい旅立ちとなった。航空便組は、富士山が眼下にすばらしかったとの事、

当方は町田市在住の為、新横浜から「のぞみ」となるが、三島から静岡にかけて右手に雄大な富士が、頂上三分程に白銀を覆い身近かに見る事が出来た。しかし二五〇〇三〇〇キロの時速では、外景にみとれる余裕すらなく、否応無く後へ後へと飛んで行く景色に、この乗物は、商用に限ると諦めた。

岡山駅は、小春びよりで琴平方面の十三番ホームには、「瀬戸の花嫁」が流れローカル線ムードにほつとした。衆知の通り四国に渡るには、今日多方の人が瀬戸大橋を通る事になる。全長十キロ弱、左右の車窓からは、大小の島々が、小春びよりの海には、往きかた漁船の数々を展望し、特急「南風」の速さなら丁度いい、この絶景は、人にお薦め出来るものと思った。

琴平駅前に出ると折り良く大阪の宮本副会長

他二名の方が居て、一緒に旅館まで同乗でき二時にチェックインできた。既に東京組の大半が入館済で部屋割りもOB順に手配され万事手際よく進められていた。

全員が揃った上でいよいよスケジュール通り行動開始とあいなった。此でこれからの日程を明記して置きたい。

二十一日(日) 十五時三十分 金刀比羅宮参拝

十八時三十分 宴会

二十二日(月) 九時高松市内観光に向けて出発

十時県立歴史博物館見学。十時

五十分栗林公園散策。十時五十

分屋島山展望台(昼食)。十三

時三十分四国村見学。十五時解

散(現地)。

．．．と云った内容のもので、当日到着早々、有志一同、金比羅さんへ向かった。陽射は早くも西日となって追いつられる様に参道へと急ぐも、旅館の裏山から登って通常ルートを探らなかつた事で途中、かの名高い日本最古の歌舞

伎小屋「金丸座」を見学する事になった。当日は休演である為、木戸から枡席へ、花道から舞台へと、更に廻り舞台の下へと実物の見学が出来た。他の人達は盛んにあちこちで記念写真を撮っていた。このあと何人かは本宮へ行く事を断念して戻って行った。いよいよ秋の日のつるべ落としを気にしながら道を急ぎ参道の鳥居ト脇道より石段登りに入った。途中、社務所で白川氏のもてなしを受け暗くならない内にと急がされるままに表書院へと入った。書院内の数々の重要文化財についての説明を聞き、又、一般には入れない奥書院へ特別に許され観覧させてもらった。この奥庭からの眺めは絶景で眼下に薄れゆく讃岐平野が紫色に染まりながら広がりが中央に讃岐富士が遠望でき、すばらしいの一言につきた。表書院では鶴の間、虎の間、七賢の間．．．等八ツの間があつて各々数十畳の部屋に重文の襦袢が見事に画かれていて、係員の説明に歴史の重みを感じた。既け外は夕闇が迫り本宮へと急いだ。本宮では本日最終の御被

を特別に、一同神殿にて受ける事が出来た。下山の石段は、暗やみの中で頼りになるのは灯笼の僅かな明かりと、己の足のみ何百段かを無事にかけ下りた。帰路は正規のルートなので表参道は街灯で明るく左右の商店は、営業中と店仕舞かどであった。参拝グループの戻りが大分遅れた割には、宴会はほぼ予定通り始まり、中村充会長(中十三)と関西代表の宮本 幸雄副会長(中十五)の二人が正面、床の間を背にしてこれを囲むようにコの字型に卒年順に座つて、あとは一般的な流れに則つて挨拶、乾杯となり会場料理と地酒、戦前戦中戦後の学園を中心にした話を肴に話題の豊富さがあちこちと飛び個々の席もあちらこちらと変わつて、あつと云う間にお開きになった。

翌朝も快晴で観光日よりとなり朝食後貸切バスで市内に向かった。ガイド嬢のあれやこれやの説明にねむい頭で頷きながら、まづ空海誕生の地、佐伯氏の氏寺、普通寺に参る。佐伯氏とは、空海(真言宗の開祖、七七四、八三五年)



後の弘法大師の生家であり唐から帰朝後、父「佐伯 善通」の荘園にこの寺を建立したのが寺名の始まりだそうである。四国八十八箇所第七十五番札所となっている。我ら一行は、駐車場からいきなり御影堂に向かったが御影堂が改築中につき全体が建設シートでおおわれて中に入る事が出来ず、それ以外の仏像や空海の誕生から晩年迄の額縁絵を仰ぎ見てから改めて正規のルートから寺社内に入る事になった。参道からの寺門入口、右脇に数十個の見なれない石柱が二本あり、その中でひときわ目立つ大入だいの石柱があって、その内の一本に松平頼

春候が大正九年に参万円を寄進したと刻られていた。進んでお守所手前左脇に相撲取りが横になったような舟形の大石が手すぎ用として置かれていた。これが赤穂浅野家の家老、大石良雄が寄進したとあった。この他に五重塔が見えてその近くに金堂(本堂)があるとのことでした。時間がなくカットされた。庭内には樹令八百年程の楠木が何本があり歴史の証しを見せつ

けられた思いであった。全体的に簡素な建物が多く明るく広々とした空間があって、何とも庶民的なお寺さんの印象であった。

ここで我々と一緒に寺内を廻っていた何組かのお遍路さんが駐車場から次ぎ次ぎとタクシィで出ていく光景に会って、違和感を持った。八十八ヶ所を廻るには早くて二ヶ月半遅くて三ヶ月の道のりで、その間いつ行き倒れになってもいいように白装束にしているとの事。生死の極限に立ち向かうという原点がいつの頃から消えてしまったのかと自問しながら、善通寺を後にした。

次に高松市内に入り県の歴史博物館へと向かった。博物館は、月曜日の為、休館になっていたが、松平家ゆかりの学園OBと云う事と事前の手配もあってか、特別に入館が許され更に係員の案内付で建設まもない(実は当月十六日オープンしたばかり)館内での説明を受けることが出来た。各階(四階から一階へと)にある国宝や重文に目と知覚を呼び起こされた次第で

いた。

今回のツアーを振り返って看るに当学園創立者の原風景が多少なりとも感じ取れてきたかなあと思えるし、先輩OB方々の人柄や人生観に多少なりとも接し得た事も出来たし、その上人文地理的な知識や香川県の文化遺産として松平家の家宝が引継がれている事も少なからず知る事ができたと思えた次第です。

平成十一年十二月二十五日

は、世に謂つ三大名園(水戸の偕楽園、越前の兼六園、岡山の後楽園)に匹敵するもので、広さでは三大名園よりもはるかに広く約二十三万坪の内に、平園として五万坪が一般に公開され、入口は北門、南門、東門と三ヶ所あり、我々一行は北門より入って、すぐに広場となる所に十二代藩主、松平 頼春候の等身大胸像があつて、その石段の所でこれを背景に各人記念写真とした。これよりガイド嬢の説明に耳を傾けながら十数ヶ所もある大小の池、何千本もの青松、赤松、雑多の草木池には、錦鯉、合鴨、樹木には鳥々と將軍家親藩の十二万石とはとにかくすごいと脱帽した次第です。

遊びの時間ほど早く駆け抜けて行くもので、既に午後三時も過ぎ一行は、解散地の高松駅へと向かった。

今回のツアーが無事終了した事で幹部への労いと年令差を超えたOB相互間の一段の親近感が増した気分、それぞれ陸路を採るグループと空路で帰るグループとに別れて帰路につ

した。又この博物館に隣接している玉藻公園これこそが我が学園のルーツとも云える所で、この公園が高松城そのものであり、江戸期の歴代の城主が松平家であり維新後の十二代藩主松平頼春候によって当学園の創設となる、と云う事が改めて認識された次第です。現在、この城には、中堀、内堀が残され堀の水は、瀬戸内の海水を導入口で調整しているとの事。二の丸、本丸、天守閣(三重五層)は、なく跡地として残っているのみ、現存しているのは、民権、月見櫓、渡櫓と水手御門でこれ等は、全て重文となっている。又藩政庁としての建物(披雲閣)は、今は一般に開放されていて会議や茶会等に使われている。

この公園を後にして小春日よりの中、源平台戦で名高い屋島山展望台へと向かうも、時間が足りず展望台行きは諦めて途中の茶屋で、名物讃岐うどんと揚げ立て天ぷらに満足し、四国村見学もカットして、松平家のお庭とも称される栗林公園の散策となった。この回遊式大名庭園



高松城より県立歴史博物館を望む。

# 同期の輪

## 中学19回生同期会

昭和20年3月卒



亀山 鈴木(司) 両君の肝いりで例年の如く開催する。参加者十八名(記念写真参照) 新井 石井 大久保 大田 大野 樋川 乙坂 重永 鈴木(孝) 鈴木(司) 高橋(昭) 玉川 野木 保谷 増田 梁 山本 横田(写真撮影後の参加)以上。

受付新井君、事務局長鈴木(司)君から報告、叙勲について保谷君勲三等授与、同君より挨拶がある。近頃楽しい事である。平成十二年の同期会は十二月第一日曜日の予定、日東 千代田、両工場へ勤労働員された仲間、軍関係に進んだ仲間多数の参加を待っています。鈴木(司)局長より健康上の理由で役を退きたいと申出がある。諒つて是非来年もとお願ひし受けてもらう。我等既に七十を過ぎるも尚意気軒高にして話の尽きる処を知らず高橋(昭)君のメて再会を約し、夕焼を背に散会する。

玉川 昭 記

## 高校3回生同期会

「梁井26会」昭和26年3月卒

去る2月26日昨年10月目黒区目黒に完成した佐々木忠次君の多目的チャイコフスキー記念東京バレエ団ビル(財団法人日本舞台芸術振興会)でワインとイタリア料理をメインにクラス会を開催した。

寒冷の2月とあつて参加者は15名と少なかつたが山内英夫会長のあいさつで始り、洋風の建物と全ヨーロッパ、アメリカを舞台に活躍する佐々木君がコレフトした、貴重な美術工芸品が多数飾られ、まるでベルサイユのお伽噺の世界に迷い込んだ様な、たゞたゞ感嘆の声につつましくクラス会であつた。



中島 記

## 高校6回生同期会

昭和29年3月卒

平成十一年六月五日(土)学校の裏門近くの『みやこ』にて三年ぶりに同期会を催した。林英夫先生、中村充窓会会長も出席され、参加者二十九名、久し振りの顔合せ、昭和二十九年卒業以来、四十五年の月日が過ぎ、それぞれの道を歩んでこられた同期の近況を述べ合い、この日はかりは時間が止まってほしいと思ひました。次回は平成十二年五月十三日に催す事にして、再会を楽しみに名残りを惜しみつつ散会しました。都合により一度も出席されない人がおりますが、次の会には是非ご出席ください。 文責 松坂 忠明



## 高校18回生同期会

昭和41年3月卒

平成十一年十一月六日(土)母校近くの巣鴨・蛇の目寿司にて、午後6時〜9時頃まで恩師の沢辺・坂井両先生と共に、クラスの間約30名参加し、和気藹々近況報告をしたりして親睦を深めました。今度は是非一泊旅行を計画したいと考えています。 その日は2次会も、有志で新宿に行き夜遅くまで先生と共に非常に楽しく時を過ごしました。 記(小倉)



## 中学7回生同期会 会誌

昭和8年3月卒



# 文化祭報告

(平成11年9月25、26日)

文化祭実行委員長

我妻光久 高20回

晴天に恵まれた平成十一年九月二十五・二十六日の両日、昨年に引き続き同窓会ブースを出展いたしました。また学校側の厚意により昨年の三階から会場が二階に移り、多数の来場者がお見えになりました。内容も同窓会会員の作品が多く出展され一層充実したものになりました。

現役の社会人が多く準備になかなか時間がとれない中、大学生の応援で展示内容が刻々と変化をし、最終日には大変素晴らしい内容のある展示会場となりました。

本年も九月三十日・十月一日の両日、参加を予定しております。会員皆様のご協力ご参加により、一層充実した展示をしたいと思っておりますので、ご協力の程よろしくお願ひします。



## 学園だより

### 高校3年生北島康介君

#### シンドニー・オリンピック出場

平成12年4月18日、23日に行われた「第76回日本選手権水泳競技大会」において、高校普通科3年の北島康介君が、1000m平泳ぎ決勝において1分01秒41の日本新記録で優勝し(世界ランキング3位の記録)、1000m・2000m平泳ぎでシンドニー・オリンピックの切符を手に入れました。

北島君は1982(昭和57)年9月23日生れ、文京区立文林中学からスポーツ推薦で本校へ入学し、東京スイミングセンターに所属し練習しています。1年次からインターハイ1000m平泳ぎで優勝するなど、昨年度の日本選手権では3位になるほどの力をつけてきました。

今年度は1月に行われた「南オーストラリ



北島君



北島君 練習風景

ア・チャンピオンシップ(年齢別大会)に出場し1000m・2000m平泳ぎで優勝するなど、1月22日・23日に兵庫県で行われた「ビートル優秀選手招待」において、1000m平泳ぎ1分01秒35の短水路高校新記録で優勝、2000m平泳ぎ2分09秒43の短水路新記録(世界ランキング5位の記録)で優勝しました。

本校の水泳部OBとしては「1982年インド・アジア大会」に出場した大隅卓也君(高校2年)、「1988年ソウル・オリンピック」三浦弘司君(国士館大学4年)、「1992年バルセロナ・オリンピック」中野勉君(早稲田大学1年)がいましたがオリンピックに高校在学中

に出場するのは初めてのことです。

北島君は『体調を万全にして、世界の檣舞台で、一段高い所に立てるよう頑張ります。』と抱負を語ってくれました。オリンピックの日程は9月16日1000m平泳ぎ予選・準決勝、17日に決勝があり、19日2000m平泳ぎ予選・準決勝、20日に決勝があります。応援よろしくお願ひ致します。

又、今年度の「日本選手権」において高校普通科2年の竹内寿史君は、2000m背泳ぎにおいて2分01秒72の記録で100分の1秒の差でおしくも2位になり、6月に行われる「サンタクララ国際大会(アメリカ)」に出場することになっていきます。



北島君 竹内君

## 本郷学園の教育

中学生の場合、特に力を注いでいるのが生徒一人ひとりにしっかりとつかりした思考能力を持たせることです。さらに日本の歴史・文化・伝統をよく理解し、世界的視野を持つことが望まれます。そのため日本の伝統に触れ、日本人としての自信と誇りを持つて的確な判断力と適応力を身につけるべき教育をすすめています。

高校の場合は、まずベースとなる知識の習得としての授業があり、そのうえで社会のルールやつきあいなどを学んで欲しい。なかでも、「ありがとうございます」「ごめんなさい」「どうぞ」など人に対して感謝の気持ちや思いやりの心を育てる躰の教育を行っている。

### 一九九九年の進路状況は次の如くである

指定校推薦制大学は、青山学院大(理工) 学習院大(法・理) 神奈川大(理工) 中央大(商・法) 東京経済大(経済・経営) 東京理科大学(基礎工・理工・経営) 日本大(法・

理工・生産工) 明治大(理工) 早稲田大(理工・商) 慶応(理工) 上智(理工)・その他

### 国立大学合格者四十七名

北海道大・千葉大・埼玉大・東京農工大・東京医科歯科大・東京都立大・富山大・東北大 その他

### 私立大学合格者八十二名

青山学院大・慶応大・芝浦工業大・中央大・東京電気大・東京理科大・日本大・法政大・明治大・早稲田大・独協大・東京農大・千葉工業大・その他

なお合格者が重複しているが、その他多数となっている。

### 特報

一九九九年の大学合格者は国立大では、農工大(9) 千葉大(3) 東工大(2) その他 東北大(2) 都立大等であり、私立大では早稲田大(29) 慶応大(17) 上智大

(18) その他明治大 中央大 等多数になっている。今後増加する可能性は大きい。

## 99学園祭

文化祭は九月三十日(土) 十月一日(日)、体育祭は中学・高校共に十月八日(日)に開かれた。テーマは「諸行無常 変わりゆくオレ達の未来へ」という生徒からの公募によるキャッチフレーズで、高校テニス部招待試合、中学サッカー部、バレー部、剣道部、サッカー部招待試合等、本校の生徒が多数応援し文化祭の雰囲気在大いに盛り上げました。又、本館を中心に様々な参加団体の催物を見られた御父兄の方々の笑顔が印象的でした。今回で四回目になる入試相談コーナーや、二回目となる同窓会コーナーもお茶のサービス等もあり、昔を懐かしむ同窓生の姿も見られ、仲々好評のようでした。

## スポーツ関係

### 高校

### 剣道部

東京都春季大会  
秋季大会ベスト16  
富嶽林大会ベスト8  
都大会団体戦3位  
第三支部大会(一年生の部優勝)  
五竜旗大会出場

### 柔道部

春季大会・都大会出場  
水泳部：インターハイ関東地区予選総合3位  
日本高校選手権 100メートル平泳ぎ1位、400メートルリレー2位 総合5位  
シドニーオリンピック選考会

①3年北島康介100メートル平泳ぎ優勝(1分01秒07) 200メートル平泳ぎ準決勝ベスト記録(2分13秒47)  
②2年竹内寿史100メートル背泳ぎ決勝5位(57秒08) 200メートル背泳ぎ決勝2位(2分01秒72)

③100・200M平泳ぎで9月シドニー五輪に出場 ④100・200M背泳ぎでサンタクルア国際大会に出場

### 陸上部

都大総体総合3位  
関東大会・全国大会出場  
アジアジュニア選手権 大前祐介 200メートル3位(2:11.17)  
国体少年A100メートル 大前祐介100メートル2位(1:04.6)

新人戦都大会 総合3位  
関東選抜新戦優勝4×100メートル(4:15.8) 大会新

### ラグビー部

春季大会・二回戦

### サッカー部

全国大会都予選二回戦進出

### ボート部

インターハイ準決勝進出(シエルフォア) 団体準決勝進出(シエルフォア) 全国選抜大会 準決勝進出(シエルフォア)

### 中学

サッカー部：東京都春季大会・豊島区第2位(都大会出場)

### バトミントン部

豊島区春季大会、団体戦1位  
個人戦3位  
シングルス5位 ダブルス1位・2位、ブロック大会出場

### 卓球部

秋季新人戦 団体戦3位(秋季も同等の成績を残す。)

### 剣道部

春季大会 個人2位 3位  
第11回東京ジュニア陸上競技大会 安野岬(2) 1) 走幅跳1位 村田智之(1) 3) 砲丸投1位

第30回ジュニアオリンピック陸上選手権大会 村田智之(1) 3) 砲丸投13位  
豊島区中学校陸上競技選手権大会 吉田裕志(3) 5) 800m 1位 中川盛之(1) 4) 1500m 2位 鈴木博(3) 1) 砲丸投2位 児矢野孝則(2) 2) 100m 3位

安野岬(2) 1) 走幅跳3位 西村利来(2) 3) 砲丸投3位

## 部活だより

日本文化同好会

### 福祉施設訪問演奏

活動を通じて…

高校日本文化同好会 部長 中井秀昌

「ボロン、ボロン…」男子校の放課後とは思えない筆の音が響く。廊下を通過する面々には一様に好奇の目を向ける。そう、日本で唯一（自論）の男子校の箏曲クラブがこの本郷にあります。

事の発端は一九九五年の文化祭。当時英会話講師であったケヴィン・オラフソン先生と崎岡先生が開いた箏曲演奏会をたまたま聞いていた私は、「一緒に演奏したいな…」と思い間もなく合奏を申し込みました。小学校の頃より箏を習っていましたので、両先生とのレベルも同じ位で翌九六年の文化祭では、演奏依頼のありました

歴史研究部の「御茶会」で演奏しました。思いがけない多くの聴衆に気分を良くしたものです。

翌九七年には同級であった杉村君、大多和君に加え、社会科講師の寫窪先生も参加し、一層の盛会となりました。

そんな中、「せっかくながら筆が弾けるのだからどこか他の場所でも演奏しよう」という意見がまとまり、奇席落語研究同好会と合唱部のメンバーとともに、同年十二月、地蔵通りにある「巢鴨ことぶきの家」で訪問演奏会を開きました。手順がつかめず失敗続出でしたが、お年寄り方にはそれが逆に良かったらしく、好評のうちに終演しました。

九八年春、私は「筆を本格的な課外活動にしたい」と当時社会科教師だった増野先生に申し出たところ、先生の担当であった奇席落語研究同好会で活動できることとなり、杉村君、新入部員五名を迎え、ここに実質的な「箏曲クラブ」が誕生したのです。

その後、部名と活動内容が不一致であったため、部名を「日本文化同好会」と改称し、落語や箏に限らず幅広い日本文化を学び、その成果を地域福祉施設訪問演奏活動で発表していくようになりました。以降、訪問演奏活動は十数回を数え、現在も続いています。

さて、肝心の箏の腕前は、というと、少ない練習時間（週一〜三日）を集中して活動してきた結果、それぞれ「中伝」「奥伝」の免状を頂くまでに上達し、九九年十一月にありました、東京都高文連中央大会（運動部のインターハイ地区予選にあたります）では、初出場、しかも全国上位校が集う中、まさに快筆と言ってよい、優秀賞・優良賞の次ぐ第三位の成績を納め、高校箏曲界を驚かせました。

これに影響されてか、今日では父母「おことの会」も発足し、合同で合宿や文化祭での演奏会を開くなど、交流を深めています。

また、福祉施設訪問演奏活動が認められ、全国の中高生のボロンティア活動を支援する目的

で創設された、「ブルデンシャル・ボロンティア賞」の奨励賞を受賞することができました。

ところで、この訪問演奏活動を行うに当たり、様々な問題がありました。楽器の運搬方法や演奏会用別途曲目の練習、進行の打合せなどが挙げられますが、特に選曲が一番の難関でありました。あくまで「箏曲クラブ」ですから、常に上を目指し難曲にチャレンジしていくのが当然ですが、そうした曲は概して「六段の調」「春の海」といった古典ではなく、「ここ数年のうち」に作曲された新曲であります。果してそのような曲ばかり演奏して、お年寄り方の楽しいと思える演奏会となるのでしょうか。そのようなことを考慮の上で、毎回好評の唱歌・古典系を多く取り入れ、それに合わせて合唱できるような歌詞カードなども準備し、新曲系を少なく選曲しています。

しかし、負担が大きい分、そこから学び得ることが多くあります。例えば、演奏終了後にお年寄り方とお話をすると、「お琴は私達が必修

であったものの一つでした」といった話をよく耳にします。今から六十年も前の箏の位置づけなど、同じ楽器に対する世代間の認識の相違点やその背景など、決して教科書や本では学べない、とても貴重なものを得ることができました。

他にも話していると、お年寄り方からもいろいろな質問がきます。「あの事件についての意見は?」「携帯電話を持つ意義は?」など。頭を悩ますものばかりですが、こつした積み重ねにより、普段ほとんど交流のない高齢者と若者の間のコミュニケーションが図れることはすばらしく思います。次第に「若者はためだ」と決めつけなくなってくることに、「お年寄り方も何でも決めつけようとしているのではないのだ」と、高齢者の対する意識を改めさせてくれました。

「今後もうこうした多方面への活動を続けていきたいですが、部員が全員高三で…」と書いていた矢先に、遂に待望の新人部員が四名現れ、よつやく箏曲に対する力べが取り除かれ始めた



## 漫画劇画部

顧問は高校は私、中学は遠田守利教諭が担当しています。平成十一年度の部員数は高校十三名(高三五、高二六、高一二)、中学五名(中二一、中一四)、計十八名です。

### 漫画劇画部の歩み

漫画家の秋本治氏により高校在学中の昭和四十二年頃に創部されました。初代顧問は秋本氏の担任の唐沢政道教諭が受け、その後関村洋教諭から芦立敏朗教諭を経て昭和五十六年に私が受け昨年中学生の漫画部と合体するに当たり遠田守利教諭が加わり現在に至っています。

部員構成としては、たまに普通科や機械科の生徒もいましたが、代々デザイン科の生徒を中心に引き継がれてきました。平成七年には工業科の募集停止に伴い部の存続が危ぶまれましたが、当時の普通科の部員の努力と頑張りによっ

て部員数は少ないながらも続けていける見通しが立ち、和気藹々の中で現在も意欲的に活動を展開しています。

現在、活動場所として多目的ホール(旧機械科実習棟)の2階技術室を借りて、水、木、土の週3回活動をしています。

### OB

「こち亀」の秋本治氏昭和四十六年度卒、「ロトの紋章」の藤原カムイ氏昭和五十二年卒、「北斗の拳」の原哲夫氏昭和五十四年度卒、「じょつだんじやないよ」の斉藤宗男氏昭和五十八年度卒、普通科からは「たいまんブルース」の古沢優氏五十二年度卒。また、米国アイズニ社からミッキーマウスの表現を許可された(日本で2人)白亥(稲見清彦)氏平成元年度卒等、数々の著名人を排出しています。

### コミテ誌と文化祭

文化祭においてコミテ誌を作成し販売してい

ますが、当初はコピーといっても所謂昔の青焼きをしたものを綴じて作成していました。平成六年には卓上製本機 製本太郎 を使って作っていたあたりまでは手作り系でしたが、平成八年以降は印刷会社に依頼し作成しています。

### まんが甲子園

平成六年まんが甲子園に初参加しました。予選で落ちましたが、平成八年の第5回大会3回目チャレンジでついに本選出場(全国で30校)を果たしました。8月に高知県で行われた本選においても決勝グループ(15校)に残りました。かなりの力量があり現地でもまわりから高い評価を受けていましたが、与えられたテーマにおける発想が今ひとつで受賞はできませんでした。昨年の第8回大会では予選において補欠校になるも辞退校がなく本選にはいけませんでした。久しぶりの出場を期していただけに悔しい思いをしました。

### 豆知識

#### まんが甲子園



全国高等学校漫画選手権大会のことで漫画家に高知出身者が多いことから高知県が平成4年(1992)から主催して実施している審査委員長はあんパンマンのやなせたかし氏、平成11年(第8回)の応募総数は386校となった。その中から30校が本選出場となる。本校も第5回大会に全国大会に出場した。

### 文化祭に来て下さい

今年の文化祭は9月30日(土)10月1日(日)に行われます。同窓会の皆さん是非来校して頂いて漫画劇画部のコーナーにおいて部誌(コミテ誌)の購入をお願いします。また、漫画劇画部の先輩諸氏にはいろいろお話を聞かせていただけたらさいわいです。

### 漫画劇画部のこれがち

歴代のまんが好きに支えられてここまでできました。最後に現部員の声をお聞かせしたいと思えます。

- ・ステッカーやバッジなどの漫画グッズを作りたい
- ・パソコンを使ってデジタル加工した絵を描きたい。
- ・今年こそまんが甲子園の本戦出場を果たしたい。

等々、楽しそうに夢を語ってくれました。  
(文責・顧問宮沢正喜)



## 平成11年度事業報告

自・平成11年4月1日 至・平成12年3月31日

平成十一年  
四月六日  
四月二十四日  
五月二十二日  
六月中旬  
六月二十六日  
七月二十四日  
八月二十八日  
九月二十五/  
二十六日  
十月一日  
十月二十三日  
十一月二十一  
/二十二日  
十二月二十五日  
平成十二年  
一月二十二日  
二月二十六日  
三月一日  
三月二十五日

本郷中・高入学式（会長・副会長出席）  
理事会・懇親会（本校会議室・みやこ）  
会長副会長会議  
定期総会・懇親会（本校会議室）  
会長副会長会議  
銀友28号発送  
学園祭・文化祭（同窓会ブース出展）  
本郷中・高合同体育祭  
会長・副会長会議  
関西本郷会主催高松ツア  
会長・副会長会議忘年会（みやこ）  
理事会・懇親会（三菱養和会）  
会長・副会長会議  
高校卒業式（会長・副会長出席）  
会長・副会長会議

## 平成12年度事業計画

自・平成12年4月1日 至・平成13年3月31日

平成十二年  
四月五日  
四月二十二日  
五月中旬  
五月二十七日  
六月二十四日  
七月二十二日  
八月二十六日  
九月二十三日  
九月三十/  
十月一日  
十月二十八日  
十一月二十五日  
十二月十二日  
平成十三年  
一月二十七日  
二月二十四日  
三月一日  
三月二十四日

本郷中・高入学式（会長・副会長出席）  
理事会・懇親会（三菱養和会）  
銀友29号発送  
会長・副会長会議  
定期総会・懇親会  
会長・副会長会議  
理事会・懇親会  
会長・副会長会議  
学園祭・文化祭（同窓会ブース出展）  
会長・副会長会議  
会長・副会長会議  
理事会・懇親会  
会長・副会長会議  
高校卒業式  
会長・副会長会議

# 本郷学園同窓会会費納入者一覽

平成12年3月31日現在

中1回 野尻 清 野本 泰

中2回 岡田孝一 重沢良平 田代康虎 長沼守人  
水野重真 栗 山巍 川辺武彦 岡部武雄

中3回 安藤正二 泉津井玄 浮揚良一 忍田太郎  
久保元吉 高松鶴吉 野本三千雄 吉村貞夫

中4回 伊藤英治 宇田川義雄 龜田 勲 小島善一  
杉本金馬 滝口頼賢 中西外茂雄 森村 亨 吉田憲二

中5回 秋山栄一 井上栄一 井上久男 石井千里  
香川健二 小山敏夫 佐藤量一 高山三郎 高須 勉  
滝口信夫 田中宗一 徳田雅彦 服部嘉丸 広瀬武次

益池正二 山田一郎  
中6回 伊神大四郎 恩田美園 大和禎人 河村利雄  
小出一夫 佐原雄次郎 田辺数夫 秀島辰弥 山本秀明

四谷輝久  
中7回 秋元庄司 大原泰治 東風谷秀雄 寺井 實  
安島研一

中8回 浅井美雄 石坂岩雄 川崎昌夫 猿橋 昇  
鈴木雅一郎 鈴木貞夫 瀬戸正弘 谷崎丈夫 竹田 亨

中16回 伊藤篤行 大沢欽一 大津泰三 加藤量次  
菊池 宏 木村康夫 小永井蓮 白井 明 高橋璋守

田中光男 田中凡夫 近澤勝利 野尻利祐 樋代幸雄  
古内正福 藤田洋一 増山善明 三阪 力 森 恭久  
和田 節 舟瀬虔一

中17回 阿出川昭治 按田仁三郎 秋田禮一  
井桁八三郎 乙部邦壽 小川 清 大村雅通

加賀野井清作 垣喜一郎 龜岡 周 佐藤元徳 斉田貢一  
齋藤敏夫 下村多氣夫 島田 威 鈴木 隆 高野正美

田中章治 田中裕一 千葉孝男 土屋一郎 寺口有喜公  
野瀬田日出生 秋生田昇 星野 実 前田昌弘 町田 滋

村松達夫 森 宏 森本昇三 藤 清平  
中18回 愛 利三 安達正治 雨宮昭二 荒木哲夫

新井義雄 青戸 将 伊藤晃一 磯川清和 磯野泰夫  
岩崎 昭 五十嵐宏 今里 隆 石田順嗣 植田 茂

榎本頼次 岡田光正 大原 功 大西 宏 大沢 清  
大島曹司 加藤浩正 蒲生勇三 金子佐多美 菊池 夫

北村廣三郎 北堀幸雄 栗山春雄 後藤良一 小山 寿  
佐々木一昭 志田芳久 菅野英夫 菅野武司 鈴木卓三

瀬川昌男 妹尾 尚 玉置 孝 田中健一 田中利雄  
千葉兼太郎 土屋恭一 鳥飼義一 藤堂正彰 富山 栄

富田和雄 豊崎益夫 友安昭治 中山 正 長谷柳三

長嶺金次郎 山中隆一 湯原 豁 鶴森輝邦

中9回 合場信次 網谷英二 有賀活郎 有村純臣  
伊藤 巖 鶴木 諱 小沢秀義 大塚秀太郎 五味重春

佐々木岸太郎 千葉青保 徳田喜一郎 長島照雄  
早速爾郎 久水康春 吉原晴夫

中10回 青井水月 伊藤龍昭 井口信雄 飯田博通  
大和多利治 大塚信男 尾城正一 久住進一 後藤恒久

佐藤 崇 斎藤 清 鈴木勝美 中川統一 毛利正利  
中11回 青野 廉 市川雄一 鶴沢快哉 小川邦夫

太田芳蔵 尾川勝助 海洋 力 角田栄三 鎌田勝雄  
木村善男 黒川興文 近藤 要 公平 武 小林義雄

関口二郎 高橋賢三 高橋耕一 戸塚貞治 永田忠哉  
長岡ゆうしん 長妻義鑑 山岸勝美 山崎治憲 八杉 繁

保持 明 林 伸行  
中12回 新井 洗 今井田貢 石原豊英 木下哲治

久保田治 後藤嘉徳 小島義之 坂口 甫 白井純文  
館野孝吉 塚田六郎 富田六之助 野田重直 堀 一郎

松岡和光 前田晴久 見並力 山田英彌 吉田 孝

野本 昭 長谷川忠也 服部定善 疋田哲也 槍垣順次  
菩提寺悦郎 間野芳夫 松永昭一 松廣 翠 松田 裕

松本純治 前田和男 宮田昭平 水原圭一 森正 徳  
森本 肇 山田卓治 渡辺豊一 渡辺信夫 村野桂三

中19回 阿出川義男 新井忠彦 岩瀬正己 石井博夫  
岡田貢一 乙坂 保 大野勝弘 貝塚明雄 龜山謙治

片山 浩 佐藤輝義 重永政夫 鈴木和臣 瀬戸芳明  
玉川 昭 高橋 實 高橋昭弥 高橋昭彌 西村 努

西島正康 野木恕市 保谷六郎 松林 豊 増田速水  
室久敏三郎 山本巖生 築 尚 横田文男

中20回 市川恒雄 大屋 忠 大塚康夫 金澤一郎  
倉田桂二郎 田島利男 鶴岡俊雄 土肥 隆 中島敬太郎

橋本公成 久永幸隆 藤林 晃 皆川敬次 山下保次  
山中伸介 吉田秀世 新井敬夫 市川 保

中21回 阿知波健 市橋光雄 板倉 厚 大下 晃  
河野英男 古門敬郎 小林國雄 島崎哲雄 鈴木秀雄

高原隆雄 田村義雄 田中一好 中林商蔵 二宮重恒  
根本幹弘 古澤秀信 藤村省三 星野昌弘 矢島信男

横澤邦彦  
中22回 有田利光 田中昭二 越田和夫 小西湧之助

坂本庄司 須田光夫 高田政雄 中原豪彦 江森俊男  
高1回 相川 厚 佐佐栄一 堀井幸次郎

吉田正吾 和氣秀夫 小松 昭 高貫結晴

中13回 阿部敬一郎 石原清助 梅田眞男 太田恭二  
川村良夫 菊田満保 久保秀郎 栗林喜久雄 公平 勇

小森為郎 杉田勝衛 鈴木和男 橋 正道 高橋 正  
寺門 務 永田三郎 中村 允 花里八郎 平本義雄

三澤義人 山口一弘  
中14回 岩村龍明 尾本 弘 尾立維久 工藤一章

佐藤三良 鈴木一郎 多賀一郎 田中光晴 長谷川親弘  
菱山勇次 藤井繁太 藤井 稔 宮崎卓郎 宮崎和哉

南 敬 森本三郎 松本八郎  
中15回 阿部敬秋 新井文一 青柳 颯 入江幸夫

奥平保正 荻原久雄 大久保雄二郎 大津栄男 菊田 治  
栗原重雄 工藤幸男 近藤 颯 佐々木象一 酒井喜四郎

島田克敏 杉田義久 鈴木利一 高山達雄 高沢 俊  
高田好一 土屋健人 飛田庄衛門 中山甲一 中西弘毅

中村美登 野村秀一 萩原友郎 畑 定 宮本幸雄  
吉松茂弥 吉田幸之輔 吉田 正 渡邊好夫 渡辺大兼

脇坂勝明 松田光博 根本卓光

高2回 福田 稔 岡村孝彦 櫻井 泰 清水真太郎  
豊嶋敬司 羽生鈺佑 宮内真雄

高3回 中村信三 秋間 政 篤頼男 石川達夫  
石塚 豊 植松隆吉 遠藤豆良 奥平博一 大沢義二

大槻一雄 大部淳夫 北見 尹 合田 平 小濱卓司  
小林敏朗 佐々木三郎 坂田 実 地曳秀雄 高橋正光

高橋 甫 中島正次郎 長崎 一 野口多喜男 平子浅雄  
前田善男 光安伸夫 望月敏郎 山岸正治 山口洋司

山内英夫 吉田孝光 渡辺五郎  
高4回 芥川孝陽 佐野栄介 西江峰夫 向井利男

八嶋政臣 渡辺武男 佐々木直剛 廣瀬 澄  
高5回 梶野伸一 谷川洋明 山崎利恭 横田文一郎

高6回 東 重信 田中 登 伊藤洋之助 小椋 一  
大久保義勝 川窪国明 柏村喜徳郎 栗原廣太郎

小林金則 小林秀行 佐々木啓之 佐瀬友貞 徳喜三郎  
霜越 信 関計一郎 高橋恵治 谷澤文雄 津久田愛之助

中山寿夫 中村義一 根立光夫 丸橋 修 松坂忠明  
松本易夫 松本一男 松本幸司 渡辺 勝 勝野恵之

高7回 秋元幹夫 井嶋佳一郎 上岡延好 武田之孝  
益川雄治 風間幹雄

高8回 金子隆一 勅使河原宏記 藤巻健三 南谷 修  
高9回 宇治川俊明 江原森太郎 川崎 孝 小林常甫



西江正晴 田辺博昭  
高10回 青木弘三 岡本信也 上岡光男 鈴木寿邦  
中河秀行 茂出木義雄 山崎昇 渡部良幸 堀溝讓治  
高11回 岩田成弘 石和田永俊 太田善夫 東平恵司  
花田宗一郎

高12回 市倉洋一 熊木宏治 辻本靖 西野保博  
高13回 安達義道 相川清 方波見茂 齋藤毅  
中村久 渡辺則綱

高14回 佐藤雄一 千野英明  
高15回 杉山雅一 高田隆義 森坂辰行 高井英行  
高17回 池田明 小野寺良雄 賀澤光浩 笹谷博正  
野田祐二 星野光明

高18回 小倉義雄 大路 悟 小松良栄 榊原康夫  
丹波信三郎 宮沢正喜 三浦淳一 渡辺武雄 北原照久  
高19回 安藤直英 遠田守利 尾村俊明 金子敏雄  
齋藤忠 中村博 水野睦夫 毛利悦久 山内寿雄  
吉川昭二 吉倉幸信

高20回 我妻光久 後藤文雄 坂井秀雄 塩原一男  
新発田和敬 関塚正治 高木久周 利根川光一 西原 薫  
野水國一 堀部雅美 平石幸夫 町田準一 矢代順一  
良川 真

高21回 菊池正美 小堺孝雄 杉山利博 鈴木 斉

工藤 琢  
高38回 森 靖 竹内久雄 寺家正治 堀瀧信幸  
寺山義泰 本荘竜二 平出 悟 保谷岳太郎 木納俊之  
垣沢真也

高39回 佐藤 實 山田 薫 西部年実 丸橋俊正  
原 次郎 日枝広道 重川孝志 福田亮一 岡本明久  
賀澤 貴 田畑 準

高41回 河越太郎 小林孝安 小松直人 小掛慎太郎  
関口隆之 岡田 博 渡邊雄一郎 千頭昇晃一 富沢信夫  
紙谷淳一 増田 茂 井原直孝 秦 正信 小林賢行  
鎌田謙二郎

高42回 佐々木好太郎 花田憲彦 本井利生 千葉 啓  
橋本俊光 三村淳悟 中川 泰 中村光邦 野口 毅  
伊藤智夫 大槻貴広 後関剛仁 吉川秀一 島村英孝  
大澤 清 櫻間一彰 藤田恵輔 佐野 禎 石本健太郎  
目黒将司 塩家吹雪

高43回 朱宮和孝 千代延尚 荻原孝明 古賀淳也  
伊藤正規 松本祐一 井上 崇 服部謙太郎 上原弘行  
梅澤正樹 中田 一郎 針谷寿紀 中村步希 西平敦郎  
野口拓来 遠藤啓介 立見友二

高44回 小久保健 鶴見裕之 蓮沼鉄也 伊東晋士夫  
北村彰浩 五十嵐靖 久保村豊 櫻井健象 丹波宏宗

中里勝男 西 正規 早川盛男  
高22回 榎沢敬明 遠藤達哉 大惠淑行 桜田吉久  
柴田秀利 鈴木正治 瀬賀春雄 土井幸雄  
高23回 芦立敬郎 小国信男 太田 治 高橋一夫  
仲原辰男 橋場弘昌 飛田 茂 吉田信昭 原 重光  
渡辺順夫

高24回 石原 涉 大杉良一 掛川俊行 進藤久幸  
田中良一 寺田正美 野田悠二 日高詳介 松島和己  
村上信夫

高25回 栗山孝治 坂井成一 莊子隆之 田島秀行  
千野邦雄 松崎敏弘 宮下博夫 山口 登 吉波行男  
高26回 有田安志 伊藤正彦 石原英雄 窪田欣志  
笹沼博之 塩谷清男 杉浦 昌 立花英一 立入健司  
平野隆之 吉田昇司

高27回 安部昌治 秋山豊弥 岩崎充晃 原田俊幸  
吉田雅行

高28回 井口 隆 江幡孝広 岡野智彦 黒沢邦夫  
田中実 中井雄一 星野武夫 堀江至久 山本和弘  
高29回 安住高弘 石塚 実 大橋弘明 小林清美  
佐藤 孝 沢田義典 塩沢 勲 島 幸男 菅野弘一  
藤井政夫 渡辺嘉伸

高30回 朝香 等 小川雅也 神山国香 佐藤修一  
小林良太 井村正實 相臺志浩 田中淳二 宮崎孝夫  
吉田光輝 中西電三郎 佐藤竜夫 木下偉雄 山口幸久  
市江知郎

高35回 山崎高實 赤田正樹 土生健二 村上拓介  
中島信之 岡田浩典 田村友宏 藤田和則 入倉一重  
鈴木康照 高井亮任

高36回 小山田弘毅 宮田宏明 岩熊曉彦 柴崎直樹  
金子 隆 鈴木健一 須藤 剛 網代欽一 谷口正太郎  
赤坂良寛 荒井昌之 下川 徹 平松拓也 村井秀行  
渡邊信貴 下川喜勝

高37回 小林靖明 山崎陽一 河村英俊 小泉源也  
北原宏晃 山崎真史 大日向知 笠井建志 安部一裕  
伊藤秀典 今氏照樹 柄澤嘉男 野口良精 島村正夫  
高橋正樹 高野知明 中村紘大 林 幹大 小嶋貴次  
西塚昌幸 加藤慎一 関根傑紀 竹内公二 三代泰平

高38回 弓田隆雄 小笠原真人 山中弘毅 鈴木善敬  
稲生雄一郎 佐藤 勝 中村織雄 柳沼 良 石井清久  
上村忠良 新谷健一 山本真広 菅沼 敦 柏村俊夫  
高井智任

高39回 町田 健 米山航史 増田 望 相上博哉  
立川嘉久 吉川高広 荒井竜太郎 杉山大樹 安井 督  
山本 直 上野光信 小澤 正 坂上聡志 土屋 真

富永浩伸 杉林正敬 鈴木宏昌 土村弘己 テイ漢文有  
中村真司 矢作明 山田 隆 吉田法夫  
高31回 安島敏男 小原 実 垣澤浩一 春日琴二  
小池 治 斎藤政嗣 東原 繁 永堀義秀 古川公泰  
高32回 磯田浩之 岩田 実 遠藤千秋 小川清志  
加藤克彦 寛 尚雄 小林秀夫 齋藤 卓 杉田勝康  
鈴木英雄 鈴木康悦 滝本 学 中田雅之 西 洋一  
西野嘉明 東 哲彦 廣島洋一 別所 篤 宮田 仁  
吉田秀樹

高33回 栗原明彦 平澤賢也 渡辺哲寛 宮崎雄一  
高34回 藤本由紀夫 鈴木 徹 西部智之 諸石貴生  
丸橋英正 小林宗郎 茂呂孝元 佐藤 学 染谷敬昭  
中村辰明 小林 晃 本荘恭一 矢嶋孝太郎 島津 勲  
井田七海 野口貴洋 増岡武宏 佐々木一宏

高35回 蝦名直人 富田恒夫 川端下徳之 奥村英治  
若狭靖輔 萩谷 功 佐々木慶和 石本 聡 杉本 淳  
田辺賢一 松本圭一 岩澤基之 直井正人  
高36回 望月仁博 土田賢一 友成公泰 横川高樹  
西山知之 矢鳥俊之 岩原昌二 高野記好

高37回 牧山高洋 宮崎浩孝 鈴木健一 玉置秀行  
中山久嗣 大田幸一 吉本光博 太田勝之 佐藤雄司  
河田洋樹 佐藤秀行 鈴木道治 大野秀樹 奥村直和

島田和輝 中溝健晴 近藤大介 千種伸宜 渡邊龍秋  
高50回 伊藤充輝 豊川浩成 西塚亨介 石塚真之  
市村重郎 小林 悟 浜野吉明 池畑将希 倉持尚弘  
横山純一 河原啓太 下関秀之 島村有希 菅沼 博  
鈴木竜也 田村崇浩 薊 真悟 清水貴寛 城光寺邦信  
瀬尾健仁 網島宗介 古川浩司 山下拓也 瀧川道生  
田口真吾 土屋 昌 山内一寿 浅野良太 坪井康浩  
柳川忠之 今成祐典 大野広行 遠藤健太郎 財津宜史  
高原修司 津久井尚 永井健志 野村耕太郎

高51回 藍田篤史 加藤千尋 鮫島 仁 中山英典  
渡邊英允 安部裕一 奥田正二郎 門山大介 縄田明彦  
平野 宙 若山貴裕 秋田真孝 宇都格之 梶野貴経  
白石佑一 樋渡玄良 佐藤英明 須賀裕哉 西岡新平  
沼尾盛史 荻原将明 尾上政史 川崎伸郎 蜂谷大輔  
阿部智則 新井亮輔 植木定史 中村元氣 根本周平  
溝沢 亮 荒川桂輔 越川雅文 柴田剛慶 高月忠昭  
滝澤一晴 行木達朗 藤岡裕起 森山倫行 若杉文寛  
斉藤光広 橋爪雄志 服部大祐 濱野和明 堀越 亮  
八巻 健 乙丸貴史 坂口大介 嶋原昌也 染谷快典  
丹羽大輔 古島 剛 松田友實 皆川裕司 若西良介  
若山晃久 植村典和 大塚久仁郎 鈴木勇樹 生井一公  
櫻井勝夫

# 本郷同窓会会則

## 第一章 名称及び位置

《名称》 第一条 本会は本郷学園同窓会と称す。

《位置》 第二条 本会は事務所を東京都豊島区駒込4丁目十一番一号本郷学園内に置く。

## 第二章 目的

《目的》 第三条 本会は会員相互の親睦を厚くし母校の発展を図るを以て目的とする。

《事業》 第四条 本会は前条の目的を達するために次の事業を行う。

会員の親睦会の開催、会誌の発刊、母校後援事業、名簿の調整と発刊、ホームページの運営、慶弔等。

## 第三章 組織・役員

《会員》

第五条 本会は次の会員を以て組織する。

会員は、母校卒業生及び卒業生待遇者並びに中途退学者で会員の紹介により理事会の承認を得た者とする。

《役員》

第六条 本会には次の役員を置く。

名誉会長 1名、顧問 若干名、相談役 若干名、

会長 1名、副会長 若干名、理事(各任期一乃三名) 監事 二名

《役員選出》

第七条 前条の役員は次の方法により定める。

名誉会長は本郷学園理事長を推薦する。

顧問は本郷学園名誉校長及び校長並びに会長経験者を推薦する。

相談役は副会長・理事・監事の経験者で会長の委嘱により推薦する。

会長は理事会において理事の互選により選出する。

副会長は理事中より会長の委嘱によって定める。

理事は、各回期毎に選出し総会の承認を得るものとする。但し選出のない回期からの理事は一名を会長が指名委嘱し総会の承認を得るものとする。

を得るものとする。

監事は、会員中より選出する。

会長・理事・監事は選出後の最初の総会の承認を得るものとする。

《役員職務》

第八条 役員は次の職務を行う。

会長は会を代表して会務を総括執行する。副会長は会長を補佐し会長事故あるときは副会長間において定める順位により会長事務を代行する。

理事は、理事会に出席して、本会の運営に参画する。

監事は会計を監査する。

顧問・相談役は会長の要請ある時は随時出席して意見を述べる。

《役員任期》

第九条 役員任期は三年とする。

## 第四章 会議

《会議》

第十条 本会の行う会議は、総会、理事会、会長副会長会議とする。

会議の議長は、会長が指名する。

《総会》

第十一条 総会は本会の最高議決機関とする。

定期総会は毎年一回原則として母校で行い会務報告、役員承認、会則改正その他本会に関する重要事項を議決し且親睦会を兼ねるものとする。

会長は理事会の議決により臨時に総会を招集することができる。

《理事会》

第十二条 理事会は理事を以て構成し理事の過半数の請求、もしくは会長の要請により開催し本会に関する一般事項を審議する。

《会長副会長会議》

第十三条 会長副会長会議は、副会長及び本会の事業を担務する理事で構成し、会長の招集によって開催、本会の運営にあたる。

## 第五章 事業及び議決

《事業の遂行》

第十四条 理事は担務を定めて会誌の発刊、企画、会計、庶務その他の事業を遂行する。

第十五条 理事会において立案された本会の事業は総会の議決を経るものとする。但し、急を要する場合は理事会において処理するものとし、次回の総会において承認を得る

ものとする。

《議決》

第十六条 会員は総会において一様に発言権・議決権を有し、総会、理事会の議決は出席者の過半数をもって決する。

可否同数の場合は議長が決める。

## 第六章 会計

《事業年度》

第十七条 本会の会計年度は毎年四月一日に始まり、翌三月三十一日に終わる。

《会計》

第十八条 本会の経費及び事業資金は入会金及び普通会员の年会費並びに寄付金その他を以てこれに充当する。

一旦納入した金品は一切返還しない。

第十九条 本会の収支決算は毎年総会に於いてこれを報告、承認を得るものとする。

第二十条 会員は年会費を一口金貳千円として一口以上を毎年納付するものとする。卒業時の入会金は参千円とする。

## 第七章

第二十一条 本会則は総会において出席会員の

三分の二以上の賛成がなければこれを改正することを得ず。

## 付則

本会則は平成11年6月26日より施行する。

以上



# 讃岐松平家江戸上屋敷跡発掘される

平成十二年四月四日 朝日新聞 記事より

## 江戸暮らし広々と

### 大名屋敷、貴重な発掘

江戸時代の大名屋敷跡として千代田区教育委員会在昨年十一月から発掘調査していた「飯田町遺跡」＝同区飯田橋一三丁目＝の概要が判明した。都内でも多くの大名屋敷が調査されているが、同区教委では「屋敷での大名の暮らしぶりを具体的に指し示すことのできる貴重な遺跡だ」としている。同区教委では十五日、遺跡見学会を開催する。

同区教委によると、この遺跡は江戸時代後期の讃岐高松藩（十二万石）の上屋敷跡。同藩は水戸藩とゆかりが深いため、「この地域が江戸城北辺整備の要にあたる」として屋敷を与えられたと考えられるという。

上屋敷は、参勤交代で江戸に大名が来た際に

暮らしていた屋敷。ここで政務もしていて、奥方も住んでいたとされる。約六千八百平方の調査からは、大規模な御殿跡や大名庭園の池など上屋敷の中心部を示す遺構が多数見つかった。板で組まれた地下室や下水溝や上水枡の跡のほか、大名の御用窯で焼かれた高松焼や六葵紋の鬼がわらなども出土した。

同遺跡は貨物操車場跡地にあたり、調査は六月末まで続く。その後は再開発としてテナントビルなどが建てられているという。

同区教委の後藤宏樹・学芸員は「これほど大規模な発掘調査は少なく、後世の開発などで御殿跡や庭園跡などが壊されずに出土した例は極めてまれだ」と話している。

